

病床日誌より

一一ノハナノナカヨリハ、三十六百千億ノ光明テラシテホガラカニ、イタラヌトコロハサラニナシ。

「療養生活」を讀んでゐたら「光明に生きるもの」題中右の御和讃の抜き書きが出てゐた。本當にさうだ、有難い有難い如來の光明の中に生きて居るのだ、それを知らぬ私でもないのに、本をよみ御説教をき、母上に常に催促されて何時死んだとて、ちゃんと覺悟はしてゐても、矢張り心の中ではもう少し生きたいとの欲望は常にある。

あ、どうして諦め得られないのであらうなど、考へてゐたら、百合子がヒョイと窓よりのぞいた。靜やんが和光を連れてゐる、日曜日なので遊びに來たとの事、百合子はここへ來るといつも歸りともながる。靜やんは和光を連れて河原に遊びに行き、歸りに迎へに参りませうと云つて出る。(畧)

靜やんの村では、今日明日が氏神祭で親元から歸るやう云つて來たが、家の方や私の病氣のことを考へてお暇は今度は貰ひますまいと云ふ、この心根が何より嬉しく涙が出る、病氣が治ったら何とか氣をつけてよくしてやらなければすまぬ。近頃こんなよいねえやんは見つからない。(畧)〔入院中、五、八、三一〕

退院の翌日：朝六時十五分起床、昨夜は割合よく眠れた。洗面後、御堂の前のお庭を歩いてみる。何だか氣がせいせいする。入院中、陰鬱な空氣の裡に起き臥しした事を思ふて有難い心地する。朝食は久し振りに芋粥を頂き、床に就く、何ととっても氣持ちよい。庭樹は茂り、青いものは目近に見え、生き返へる様な心地する。和光が朝起きて來て、襖を明けのぞいて見て、何とも云はずキョトキョト暫く、不思議相に見つめてゐるが、ヘラヘラ笑つて去る。食卓の前に坐れば足が冷いとか、こ、へトンをせいとか云つて私をいたはり喜ぶ、本當にガサガサもので、長い間、お母様に御苦勞をかけてゐたことをすまなく思ふ。(畧)〔五、一一、一一〕